

# イベント企画の基本原論 「6W2H」誕生秘話

一般社団法人日本イベントプロデュース協会イベント総合研究所

所 長 小 坂 善治郎

副所長 小 暮 進

副所長 赤 羽 政 嗣

## はじめに J E P C 知的創造資源

(この稿は、すでに冊子で発表した再掲です)

JEPC イベント総合研究所が、一般社団法人日本イベントプロデュース協会(JEPC)のさまざまな活動の中で、一つの知的創造活動(研究)から生み出された「J E P Cの知的資産 - 6 W 2 H」の素晴らしい卵の事実の概要をまとめたものです。誰もが「コロンブスの卵」の話を生かしておられるでしょう。

「6 W 2 H」は「JEPC のコロンブスの卵」のことで、イベント企画・計画の基本構成要素のことです。1986年にJ E P Cが設立されて、イベントやその周辺で活躍した当時としては精鋭のプロ集団がさまざまな検討と研究、時には大激論ののちにまとまったものです。

いとも簡単に生まれたものとお思いでしょうが、決して楽に生まれたものではありません。それは、すでにマスコミ等の通用ワードであった「5 W 1 H」から始まりました。そして、城義紀氏のJ E P Cイベントカレッジの第1回講義で「7 W 3 H」が発表されました。そこから、さまざまな研究が生まれ、時には大激論があり、その結果「6 W 2 H(8項目)」に決定しました。当然その過程で論じられた「5 W 2 H」「6 W 1 H」「7 W 2 H」「7 W 3 H」もJ E P Cの知的資産として重要なものです。

このようにして「6 W 2 H」が JEPC によって生み出されたことは事実であります。この事実だけをご承知ください。ですから、そこにはさまざまな秘話があります。秘話はまた改めてさまざまな機会を頂きお話ししましょう。そこに立ち合った者にしかその真実は理解できないものですから、ここで再確認するのです。思い出すと、よくも日々深夜まで(時には酒もあり)できたなあと、とても懐かしいものです。しかも素晴

らしい知的資産が残りました。

平成 21 年 6 月 11 日

JEPC イベント総合研究所所長 小坂善治郎

## 「6 W 2 H」形成までの主な経緯

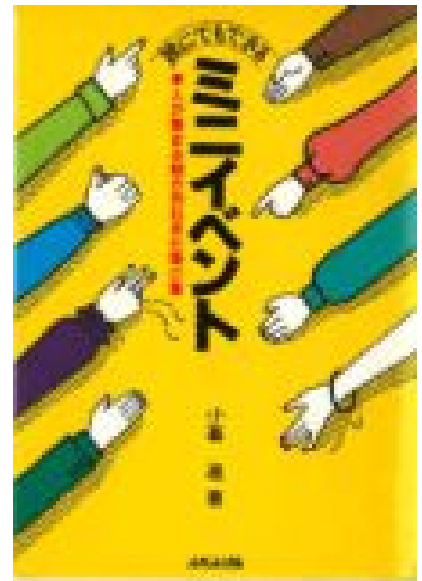
【J E P Cの知的財産となるまで】

1. イベント企画要素に5 W 1 Hを取り入れる

出所：小暮進

著「誰にでもできるミニイベント」1983年11月30日MG出版発行

26頁に「イベント企画は『5 W 1 H』で考える」の項目で、「新聞記事の必要条件として、よく『5 W 1 H』といわれる。こ



れは新人の新聞記者がまず最初に先輩記者から教わることであり、何か事件にぶつかって記事を書く際、必ず念頭におかなければならないことである。……イベント企画を考える場合でも、この『5 W 1 H』を頭に入れて想を練らなければ、とんでもない見当違いをやりかねない」と記述されているように、マスコミ等で一般的に使用されていた「5 W 1 H」を、イベント企画にもはじめて援用した。

### 5W1H

WHEN	(いつ)
WHERE	(どこで)
WHO	(誰が)
WHOM	(誰に向かって)
WHAT	(何を)
HOW	(どのように)

## 2. JEPC イベントカレッジで「7W3H」が提示

[1987年]

1987年3月12日～14日に開催された第1回 JEPC イベントカレッジにおける「イベント企画の構成」について、城義紀氏が担当し、そこで「5W1H」をベースにして、適確性を求めるために「7W3H」が提示された。7W3Hは、5W1HのWHOMを「With Whom」、「To Whom」に分割して7Wとする。3Hは、HOWを分割して「How to」、「How Long(長期視点)」と「How Much(予算)」をいれた。極めて明確なイベント企画要素の提示である。

### 7W3H

WHY	(なぜ)
WHEN	(いつ)
WHERE	(どこで)
WHO	(誰が)
With WHOM	(共催者)
To WHOM	(誰に向かって)
WHAT	(何を)
HOW To	(どのように)
HOW Long	(長期的視点)
HOW Much	(予算)



第1回のイベントカレッジ修了の後、小坂等はイベント企画要素の「7W3H(10項目)」をもう少し減ら

すことはできないか、との提案がなされテーマとして取り上げられた。JEPC 研究部会を中心に研究することになった。

## 3. イベント戦略データファイルの編集と刊行

[1987年]

7W3H 簡素化6W1H 6W2Hへの提案



1987年11月17日、JEPC 設立1周年記念として、日本イベントプロデュース協会編集(通商産業省商務室編集協力)「イベント戦略データファイル(加除式)」(出版第一法規出版)が刊行された。

第1回の「イベントカレッジ」は大成功に終わった。この要因は、1時間(90分)の25コマを担当された講師陣の熱意にあった。その背景には6週(木曜日)に亘るカレッジコースを「どのようにするか」といった構成会議があった。平野繁臣先生のもとで6週間のカリキュラムを担当講師の出席のもとで行われた。青山学院大学の教室で実施したのであるが、1日では終わらず何回も研究会議をした(実は、この会議の中に、極めて多くの研究シーズが入っていたのである)。

ここで生まれた各講師のテキストシートと参考資料は膨大なもので、A4版の厚いファイルの1冊に収まらなかった。事務局担当の小坂も赤羽氏、白川さんも連日連夜の作業に没頭した。

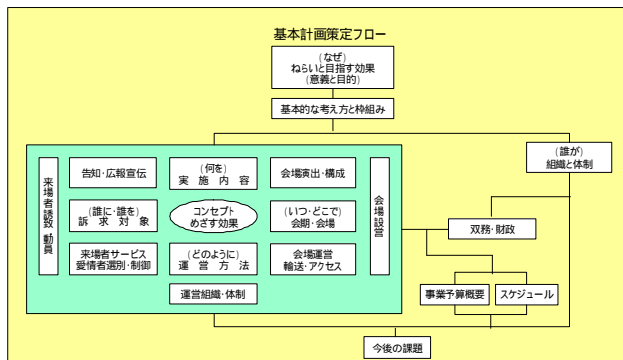
この成果を出版して欲しいとの出席者(受講参加者と担当講師陣)からの強い要請が生まれた。

出版社も数社からご提案を頂いたが、第一法規出版の社員の方がこのカレッジに参加しており、よく熟知研究されていたことにより、出版を第一法規出版との共同作業とした。また、通商産業省商務室も編集協力をいただいた。この出版制作の作業も大変であったが、11月17日の設立記念式には間に合った。大好評を得た。

この出版作業を進める中で、「イベント企画・計画要素」の検討を繰り返した。

平野暁臣氏は「イベントの基本計画」(469から全40頁)の中で、「誰が」「なぜ」「いつ」「どこで」「何を」

「誰に」「どのように」を明らかにするよう述べている。ただし、「どのように」の中に「管理運営」と「予算は？」を示されている。そして、「基本計画の策定フロー」(469の9頁)では、イベント企画・計画要素の関連図が示された(下図)。このフローをよく研究すると、見事に「6W2H」になっている。



このようなもとの、城義紀氏は「企画書の作り方」(481～489頁)の中で「イベント企画の要素は6W2H」と記述したのである。「6W2H」と明示されたのは、この記述がはじめてであろうと思う。

このような JEPC の大きな作業とイベントのプロ集団の検討によって、「6W2H」が段々と形成されつつ私たちの共通言語になってきた。

この「6W2H」をどのように、イベント業界はもとより一般社会に広めるかという作業がさらに続くのである。

#### 4. 6W2Hのさらなる研究

JEPC は5つの部会活動を実施した。その中で研究部会(部会長北村明久氏)では、「イベントの定義」と「イベント企画の要素」および「イベントプロデュースのあり方」を提示し、1988年5月26日、JEPC 研究部会による「イベントの定義とイベントプロデュースのあり方を考える」が発行された。



その中で、「イベント企画の基本事項(水野正道氏担当)」23頁に「6W2H」が提示されている。

#### イベント企画の基本事項

水野正道「イベントの効果測定技術体系」より

##### (1) 主体要素

主催者 (By Whom・・・)

単独か、複数か)

目的 (Why・・・)

主要目的と副次目的)

対象 (To Whom・・・主たる対象)

内容概要 (What・・・)

基本項目と重要度順位)

##### (2) 従属要素

場所 (Where・・・)

単独化、複数化、野外か屋内か)

期間 (From & To When・・・)

準備・予告期間、開催期間)

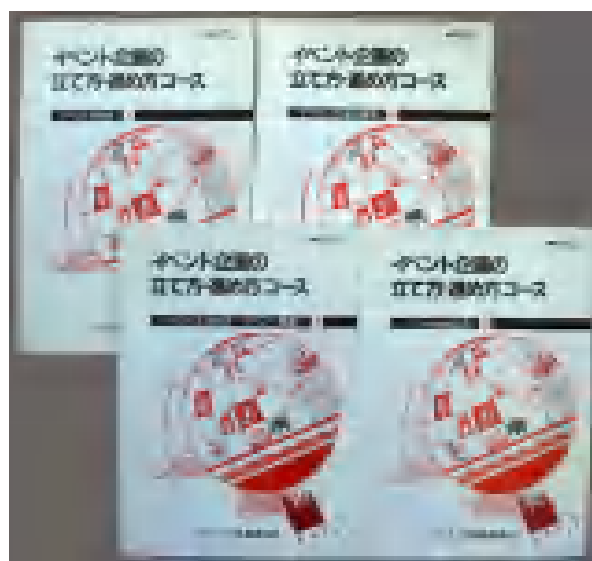
方法 (How To・・・)

制作方法、運営方法、PR方法)

予算 (How Much・・・予算規模)

#### 5. 通信教育に企画要素8項目(6W2H)明示

1988年10月、社団法人日本能率協会の通信教育コースにおいて、JEPCメンバー(小坂善治郎、小暮進、赤羽政嗣、須川一幸他)編集による「イベント企画の立て方進め方コース」のイベントの企画立案編において、イベント企画の要素として、前項のJEPC研究部会においてまとめられたイベント企画の基本事項を明示(第2巻16頁)。



## イベント企画の要素

### (1)主体要素

- 主催者 (By Whom・・・単独か、複数か)
- 目的 (Why・・・主要目的と副次目的)
- 対象 (To Whom・・・主たる対象)
- 内容概要 (What・・・基本項目と重要度順位)

### (2)従属要素

- 場所 (Where・・・
  - 単独化、複数化、野外か屋内か)
- 期間 (From & To When・・・
  - 準備・予告期間、開催期間)
- 方法 (How To・・・
  - 制作方法、運営方法、PR方法)
- 予算 (How Much・・・予算規模)

## 6. 日経文庫「イベント戦略の実際」に6W2Hを明示

1991年2月20日発行、小坂善治郎著日経文庫「イベント戦略の実際」日本経済新聞社発行の138頁に明示。

企画の基本要素として、イベントの企画に当たって、その基本要素を「5W1H」の応用型として「6W2H」でまとめている。

139頁にイベント企画の基本要素(6W2H)として、区分および検討項目にまとめている。



イベント企画の基本要素(6W2H)	
区分	検討項目
Why (なぜ)	・目的・目標(効果) ・コンセプト
When (いつ)	・シーズン特性(春・夏・秋・冬) ・時間特性(朝・昼・夜) ・期間(ヵ月・1週間・1回など)
Where (どこで)	・地域特性(都心・郊外・海・山等) ・会場特性(屋外・屋内)
Who (だれが)	・主催者 ・後援団体
Whom (誰に)	・年代別特性(シルバー・ファミリー主体等) ・性別
What (何を)	・イベントの内容(テーマ・アイデアプランなど)

How (どのように)	・演出方法
How Much (いくらで)	・イベント予算

## 7. JEPC・6W2Hの完成

1991年4月1日「これからのイベント活用コース」

日本マンパワー(全3冊と別冊2冊)

JEPC刊(総監修;平野繁臣、編集責任者;小坂善治郎、執筆;小暮進、須川一幸、

石山盛也、後藤貞雄、赤羽政嗣、城義紀、藤本正他)

ここではじめて第1冊目の「イベント企画の基本」において、「6W2H」をJEPCとしてまとめあげたことになる。



### 第3章イベントと企画の基本55頁

イベント企画の基本要素(6W2H)	
区分	検討項目
Why (なぜ)	・目的・目標(効果) ・コンセプト
When (いつ)	・シーズン特性(春・夏・秋・冬) ・時間特性(朝・昼・夜) ・期間(ヵ月・1週間・1回など)
Where (どこで)	・地域特性(都心・郊外・海・山など) ・会場特性(屋外・屋内)
Who (だれが)	・主催者 ・後援団体
Whom (誰に)	・年代別特性(シルバー・ファミリー主体等) ・性別
What (何を)	・イベントの内容(テーマ・アイデアプランなど)
How To (どのように)	・演出方法
How Much (いくらで)	・イベント予算

このように、1987年からスタートした「イベント企画の基本要素」は3年の歳月をかけて明確に完成したといえる。

6W2Hは、JEPCが創立されて、多くのプロ集団により完成されたJEPCの知的創造資源です。

その成立について、よくご理解いただけたと思います。

JEPC知的財産権.....

これから「6W2H」をご利用される場合は、次の中から、必ず出所をご明示ください(2つの方法があります)。

1.注をとり引用部分を「 」(注 )等の方法で著者と引用文献を明示する。

(1) 日本イベントプロデュース協会編(平野繁臣他)「イベント戦略データファイル」第一法規出版 1987.11.17 488頁

(2) JEPC 研究部会編「イベントの定義とイベントプロデュースのあり方を考える」日本イベントプロデュース協会発行 1988・5・26 23頁

(3) 小坂善治郎著「イベント戦略の実際」日本経済新聞社 1991.2.20 138・139 頁

(4) 日本イベントプロデュース協会編(平野繁臣監修、小坂・赤羽・小暮・須川他)「これからのイベント活用コース」日本マンパワー1991.4.1 55 頁

2.文章に著作者・編集者と機関を下記のようにし、巻末に文献リストをきっちりとする。例えば次のようにする。

(1) 「イベント戦略データファイル」(1987)でイベント企画の要素をまとめてある。

(2) 小暮進(1983)はイベント企画要素に5W1Hを念頭におくと述べている。

(3) 平野暁臣(1987)はイベント計画基本フローを 図のように示して、イベント企画要素を説明している。

(4) 城義紀(1987)はイベント企画要素は「6W2H」で説明できると述べている。

(5) 小坂善治郎(1991)はイベント企画の基本要素は5W1Hの応用型として、「6W2H」が適当であると述べている。

このように、著作者または編集者・機関の次に( )の中に発表年を記入する。このことにより、著作者の明確を保つのである。そして参考文献として巻末に列挙する(著書はA・B・C……に並べる)。

参考文献(または引用文献)

・日本イベントプロデュース協会編(平野繁臣他)(1987)「イベント戦略データファイル」第一法規出版

・JEPC 研究部会編(北村明久他)(1988)「イベントの定義とイベントプロデュースのあり方を考える」日本イベントプロデュース協会

・小暮進(1983)「ミニイベント」MG 出版 26 頁

・小坂善治郎(1991)「イベント戦略の実際」日本経済新聞社 139 頁

・城義紀(1987)『企画書の書き方』日本イベントプロデュース協会編「イベント戦略データファイル」収録 第一法規出版 481 頁

・平野暁臣(1987)『イベントの基本計画』日本イベントプロデュース協会編「イベント戦略データファイル」収録 第一法規出版 469~9 頁

(参考文献の列挙のみは科学的ではありません。ご注意ください)

出典・出所の明示の仕方は「JEPC イベント総合研究所」にお問い合わせください。